

占領期・1950年代ソビエト映画紹介者としての土方敬太

吉田 則昭

1 はじめに

ロシア革命から約30年後、占領期に流入したソビエト文化は、1956年10月19日の日ソ国交回復（日ソ共同宣言）まで、通常ルートとは異なる複数のニッチな経路からその受容は行われていた。敗戦後、日本政府は国交のない国との交流は原則不可として、日ソ文化交流をできるだけ制限する方針をとった。このことにより国交回復まで日ソ文化交流に関する政府間交渉はほぼ皆無であった一方、民間ルートによる日ソ文化交流は、占領期から国交回復までの時期において、その大部分を占めることになった。1940年代から50年代は日本側では左翼の個人的つながりから行われていた日ソ文化交流が組織・団体によって行われる状況となる。

本論では、戦後日ソ文化交流の中でもあまり注目されたことのないソビエト映画関係者の土方敬太の活動を取り上げてみたい。土方敬太自身が執筆した、著書は共著のみであり、戦後は雑誌などの記事が散見されるだけで評伝も残されていない。

先行研究としては、占領期における映画政策を扱った谷川建司『アメリカ映画と占領政策』（京都大学学術出版会、2002）が、米国公文書を用いて一国一社制、輸入クォータ制について

論じている。またソビエト映画研究の立場から、フィオードロワ・アナスタシア『リアリズムの幻想——日ソ映画交流史 [1925 - 1955]』（森話社、2018）が、ロシア側公文書から占領期におけるソ連映画について考察している。しかし、いずれの研究もソ連側の一国一社制、個々の映画関係者、映画検閲の実態については十分に分析されていない。

本論では、占領期・50年代、GHQ占領当局およびソ連側と折衝しながら、ソビエト映画の普及・上映に奔走した土方敬太の活動に注目する。また、占領期文化の一環としてのソビエト映画の流入・受容を、占領政策を参照しながらGHQ公文書、ソビエト映画関連雑誌などから検討していきたい。

2 占領期の活動

まず、本稿で取り上げる占領期・1950年代のソビエト映画紹介者の土方敬太について、概要を紹介しておきたい。土方敬太は、1920年9月9日、演出家で伯爵の土方与志（1898 - 1959）の長男として生まれた。祖父・久元（1833 - 1918）は元宮内大臣であり、弟は戦後のうたごえ運動創始者で、演出家の土方与平（1923 - 2010）である。敬太は、1933年、豊島師範付属小学校を卒業、東京府立五中に入学直後、父親の訪ソに同行し、1933年4月に神戸を出発、5月末にソ連・モスクワに到着、モスクワ第一小学校へ入学した。9月、当時モスクワにいた片山潜に依頼して、国際解放犠牲者救援会（モップル）の「国際子供の家」という寄宿制の学園に移り、1933 - 37年の4年間、ソ連の中学校で過ごした¹⁾。1937年8月には家族でフランスへ移住、敬太はパリの学校（モ

ンパルナスの電気専門学校・エコール・プレゲー)にて学んだ。

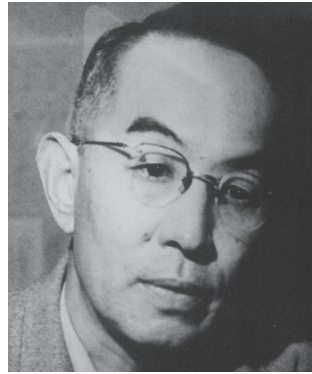
1941年7月、日本に帰国することとなり、横浜港へ到着、その後、神奈川県久里浜の海軍通信学校(横須賀海兵団)に入隊する。母親・梅子は、日本の大学で学ばせるために親戚や知人に頼んで交渉したが、「赤い伯爵」こと与志の息子をどこの学校は受け入れてはくれなかったと記す²⁾。

日本の敗戦時、20代半ばであった敬太は、ロシア語を活用しながら、ソ連関連の幾多の職を得て、各方面で活躍することになる。戦後、急遽ソビエト関連情報が流入する状況の中で、モスクワでの生活で得たロシア語力で文学、演劇、映画などのソ連事情を紹介した。

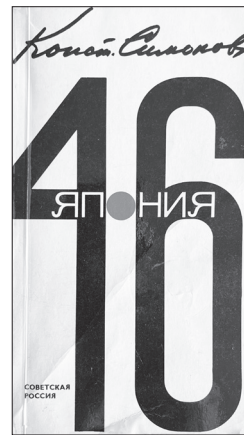
1945年12月には、ソ連の作家シーモノフ、アガーポフ、クドレワーディフ、ゴルバートフら4人がソ連国営通信社・タス通信の特派員として来日、土方与志・敬太の親子は、特にシーモノフと交流を深めた。そしてシーモノフは、1946年まで半年以上、日本に滞在した³⁾。

このときのシーモノフらの来日が契機となって、1946年5月、土方与志らが中心となり日ソ文化連絡協会を設立、土方敬太もこの業務を手伝った。やがて1949年には、労組・抑留者団体などが母体となって日ソ親善協会が設立された。日ソ国交回復の機運の高まりとともに、ソ連側にも1958年に日ソ協会が発足する。こうして左翼人らの個人的つながりによる文化交流から、日ソ両国の文化交流団体を設立しての交流へと推移していく。

1950年代、土方敬太は、主にソビエト映画の輸入・配給、宣伝・普及の業務にあたった。その後1959年にはタス通信社東京支局に勤務、1961年以降、日ソ協会の杉並支部事務局長、1964-65年、政治路線をめぐる日ソ協会の分裂を経て、1965年には日ソ協会本部に勤務した⁴⁾。1968年の新聞記事では、ゴーリキー生誕百周年記念祭・準備委員会事務局長として紹介され、「日本人ばなれのしたロシア語



土方与志



シーモノフ『日本 - 46』

で仕事を続けてきた」とも記されている⁵⁾。

次に、占領期以降、本格的に土方敬太がソビエト映画の紹介に取り組むまでの活動のみをみておきたい。土方敬太は、詳細な経歴を残していないため、ソビエト映画の普及にあたる1949年頃までの経歴が不明である。土方自身も「辞表と履歴書ばかり書いていた」と述懐するように、ソ連関連の幾多の職業を転々とした⁶⁾。

以下に、戦後雑誌にみる土方敬太の職歴を、20世紀情報メディア情報データベース(<http://20thdb.jp/>)の記事から抽出し、所属・肩書を記してみた。

1946年は、「ソヴィエト大使館囑託」(『週刊少国民』3月17日号)、「作家シーモノフ翻訳者」(『思潮』5月号)、「対日理事会ソヴェト文化部勤務」(『児童文化』10月号)とあり、



土方敬太

1947年では、「土方与志氏令息」(『ダンス』11月号)、「ソヴェト研究者協会会員」(『ソヴェト文化』12月号)と記されている。1948年では、「ソビエト研究者」(『婦人』9月号)とあり、1949年は、「北星商事勤務」(『ソヴェト文化』3月号)、「演劇研究者」(『DEMOS』8月号)とあるように、1946年から50年にかけては、ロシア語通訳の傍ら、演劇や文学の記事や翻訳記事を寄稿している⁷⁾。そして1951年は「北星映画株式会社社員」(『思想』1951年8月)とあり、1955年には「日ソ貿易渉外課長」(『日本とソビエト』1955年11月15日)、教育学者マカレンコの「翻訳者」とあるので、およそ1949年から1954年までの期間、ソビエト映画の紹介にあたっていたと推測できる⁸⁾。

3 一国一社制の下でのソビエト映画配給

1945年11月、GHQは、外国映画の配給機構について声明を出し、アメリカ8大メジャーなどの配給会社が合同でCMPE(Central Motion Picture Exchange、セントラル映画社)を設立することを発表する。12月以降、GHQ/CIEの外郭団体として港区芝田村町(現在の新橋)にてアメリカ映画を一元的に管理することとなる⁹⁾。こうした一元的管理は、当時、一国一社制と称されていた¹⁰⁾。CMPEはハリウッド映画産業側が期待していたような私企業の団体ではなく、日本を民主化するという占領

目的の進展を図るCIEの外郭団体という形での業務開始となり、建前上はアメリカ国務省国際映画部の活動目的に合致する形で始まった。

こうしてアメリカの映画界が一国一社制として一本化された同時期、1945年11月に戦前からのソビエト映画会社・日ソ映画社の社長であった袋一平(1897 - 1971)は、ソ連代表部宛に「ヤブキノ(ヤボンスコエ・キノ=日本映画)は、スタートを切る準備が整いました。突進する指示を待っている次第であります」との手紙を送っている¹¹⁾。1937年以降、ソビエト映画の輸入は禁止されており、それを再び上映していくことへの袋の意気込みは強かった¹²⁾。

ソビエト映画の場合、一国一社制の下、対日理事会ソビエト代表部の中に窓口を構えていたソ連映画輸出協会が1947年8月に設立され、日本の輸入代理店に対しソビエト映画を提供する形をとった。

占領下におけるソビエト映画配給の流れは、ソ連本国ではソ連映画輸出協会が窓口になり、その日本での出先機関が対日理事会のソビエト代表部(当時は軍人のデレビヤンコ、キスイレンコなどが駐在)の中に開設された。入荷した作品は同協会日本支部からCIEそしてCCDに提出され、ここで日本語字幕版が制作されて、劇場との契約に基づいて上映されるということになっていた¹³⁾。一国一社制による配給までのワークフローは、基本的にアメリカ映画の場合と変わらなかったが、ソビエト映画では、許可された配給本数、作品に対する検閲がアメリカ映画とは比較にならないくらい厳格に行われた。

GHQ文書で具体的にみると、1946年6月3日、日ソ映画社の社長・袋一平と副社長の服部数政は、CIEのドン・ブラウンと面会し、ソビエト映画上映再開の許可を求めて面会している¹⁴⁾。また同社は、11月に「社名及社内構成報告ノ件」を「映画検閲課」宛に提出し、「現在複写版權ヲ与エラレタルハ左記ノ六映画ニ対シ何レモ貴課及経済科学局ニ上映許可申請

中ノモノナリ」としている¹⁵⁾。そして、11月12日に、入手経路、検閲申請映画題名が記された「ソビエツト映画検閲申請ノ件」が提出されている¹⁶⁾。

戦後の日本で最初のソビエト映画が公開されたのは、1946年の暮れに入ってからである。その上映許可が下りたのはさらに遅く、1947年の後半になってからであった。

他方で1946～47年のソ連側の対日映画政策は、GHQの手続によらず、職域、労働組合などで自国の映画の上映会を催すというピンポイント的、ゲリラ的な方法でソ連シンの日本人ネットワークを作るという戦略であった。例えば、ソビエト代表部の置かれた三菱ビル21号館において、毎週金曜日の18時に約300人の聴衆が参加の下、ソビエト映画が上映され、1946年10月には『偉大なる転換』『石の花』が上映されていたとの記録が残されている¹⁷⁾。ほかにもGHQ文書からは、職域、労働組合での自主上映の動向が随時チェックされていることがわかる。

1949年時点でソビエト映画の上映は、大手映画会社の東宝の配給に依拠するようになっていたものの、それは興行としても「乞食が旦那様のお情けにすぎるといったありさま」（袋一平）だったため、直営的な組織でのソ連映画普及、とりわけ「一番重要な問題は上映組織の民主的な確立」（岩崎昶）を考えなければならないとしている¹⁸⁾。

戦後初のソビエト映画公開は、1946年11月に上映された『スポーツパレード』というソビエト体育祭の記録映画であった。ソビエト映画の日本輸入は英仏両国より早く、1947年8月、ソ連映画輸出協会に許可が降りると、9月30日には『モスコオの音楽娘』が公開される。1948年までに公開されたソ連映画はのべ12本であったが、そのうちカラー映画が、前記『スポーツパレード』であり、1947年公開の『石の花』、1948年公開の『シベリア物語』の3本であった。

他方、映画公開までの期間、GHQはソビエト映画の上映をめぐる配給会社の調査も行ってた。土方敬太は、対日理事会内のソ連代表部で仕事をしてきた関係もあってだろうか、北星商事が競合他社以上に一国一社制の下でソビエト映画の窓口としての比重を徐々に高めていくことと軌を一にして、土方の存在感も高まっているようにみえる。だが、そうしたソ連代表部内でのプロセスはロシア側公文書を調べないとみえてこないだろう。ただし、GHQ文書にはCIE及びCCDにも「北星商事（North Star Company）」の記録が多く残されていることから当局はかなり注目していた。

北星商事は1947年11月、ソビエト映画に関心を持つ文化人によって設立され、ソビエト映画の輸入のほか、日本製機械の輸出やソ連製品の輸入の事業を行うことをその目的に掲げている¹⁹⁾。また別の文書では、北星商事の資本金は19万5000円であること、日ソ映画社、映画配給会社（映配）に次いで3番目に配給の権利を得ている会社であること、16ミリフィルムの日本における全配給権を得ていることを、社長の河野重弘の証言として記録している²⁰⁾。

興味深いのは、別の資料にみる日ソ映画社の動向である。1948年段階の同社社長は中井一夫である²¹⁾。中井の妻がGHQを訪問し、その際、ソ連映画輸出協会は中井夫人らに日本共産党に入党するように促し、拒否した場合、取引は継続されないと伝えられたことを報告している。そして、1949年3月の連合通信電を通じて、ソ連映画輸出協会は、日ソ映画社との取引を北星商事に引継がせ、映配を通じてソビエト映画配給を行うとの告知を流していると伝えている²²⁾。この時点でソ連側はソビエト映画の主たる配給会社の切り替えを行ったものと考えられる。

土方敬太は1949年頃から北星商事に勤務していたことから、1950年以降、同社発行の雑誌『ソヴェト映画』創刊にも加わる。土方敬太の入社には、父親・与志が北星商事の監査役に

名を連ねていたことも関係しているのかもしれない。GHQは、土方親子という「二人の土方」を厳密に区別していなかったようであり、関係部局に注意喚起のメモ書きを残している²³⁾。

1950年2月の『ソヴェト映画』創刊号の表紙見開には、当時の大ヒットしていた『シベリア物語』の広告が掲載されている。同広告には、ソビエト映画の輸入代理店として、「ソ連映画輸出協会提供 北星映画株式会社配給」と記されている。

4 スターリン賞における「記録映画」「劇映画」とその紹介

占領期、ソビエト文化受容の主たる基礎を築いたのは、『ソヴェト文化』（1946 - 1949）や『ソヴェト映画』（1950 - 1954）といった雑誌であった。ソビエト文化人脈の中心にいた土方敬太は、ソヴェト研究者協会・日ソ文化連絡協会発行の雑誌『ソヴェト文化』に映画記事を寄稿し始め、北星商事では『ソヴェト映画』の創刊に関わった。

『ソヴェト映画』創刊号には、亀井文夫・河原崎国太郎・土方敬太による「ソヴェト映画の印象」という座談会が掲載されている²⁴⁾。同誌はソ連を中心としつつも、共産化した中国の状況、日本の独立プロ運動の情報も紹介し、前進座の河原崎長十郎、独立プロで作品を発表していく今井正、山本薩夫といった映画作家たちも寄稿している。

また同誌は映画やソ連だけに特化した雑誌ではなく、東欧や東アジアの社会主義国における映画制作事情や、1950年代の日本で起こった独立プロ運動に関する情報、ソビエト連邦における文学や美術、演劇やスポーツをめぐる記事が掲載された。ロシア民謡「カチューシャ」の楽譜（関鑑子）や、伝統的なロシア料理のレシピ、ロシア人が着る民族衣装の縫い方（土方梅子）など、取り上げられる題材も多様であった。

『ソヴェト映画』の編集部は、創刊号のなかで「ソ連映画輸出協会のひとかたならぬ御指導



左『ソヴェト文化』
右『ソヴェト映画』

と御援助」に対する感謝の意を表明し、同協会日本代表であったD.レフチェンコは、モスクワ本部に宛てた手紙のなかで、「ソビエト映画を宣伝するための最も有力な手段」として、雑誌『ソヴェト映画』の発行と宣伝を挙げている。ソ連映画輸出協会を通して編集部へ届けられた映画関連資料は、ソビエト国内で出版された新聞・雑誌からの抜粋であり、1950年代初頭のソビエト映画における支配的傾向を多分に含んでいた²⁵⁾。

創刊当初の『ソヴェト映画』は、北星商事とソ連映画輸出協会による共同企画としての性格が強かった。1940年代後半から1950年代初頭のソビエト映画は、カメラや被写体の動きは最小限に抑えられ、映画における主要なメッセージは口頭で伝えられた。内容面でもスターリンの個人崇拜色の強い映画、第二次世界大戦での勝利をドキュメンタリーで描いた「芸術記録映画（フドジュストストベンヌイ・ドキュメンタリヌイ・フィルム）」、民族舞踊やバレエ、オペラを撮影した「コンサート映画（フィルム・コンツェルト）」などが目立った²⁶⁾。

だが、1920年代におけるアヴァンギャルドや1950年代後半に台頭するソビエト・ヌーヴェル・ヴァーグと比べて、この時期に作られたソビエト映画は著しく劣っていた²⁷⁾。実際、スターリン体制の末期、ソ連の映画産業は著しく停滞していた。こうした事態を生み出したのは、第二次世界大戦による経済的なダメージ

ジヤソ連共産党政治局員ジダーノフによる「コスモポリタン」批判といったイデオロギー統制などであった。

そうした時代状況の中で、『ソヴェト映画』には、1940～1951年のスターリン賞作品リストが付されたソビエト映画未公開作品の全リストが掲載されている²⁸⁾。備考欄で全作品のスターリン賞受賞年が付されている。同賞の映画ジャンルは、「記録映画」「劇映画」の2部門に分けられる。これら2部門はスターリン賞からみた場合のジャンルであったが、『ソヴェト映画』誌上では厳密に区分されていないこともあった²⁹⁾。

ソヴェト映画の特長は劇映画とならんで記録映画が大きな位置を占めていることである。資本主義では芸術映画は劇映画だけを意味するが、ソヴェトでは記録的映画も芸術映画である。これは毎年スターリン賞をうける作品に、劇映画とならんで記録映画のあることがよくしめしている³⁰⁾。

1951年のソ連の映画大臣の発言においても、これら二大映画ジャンルについて言及されている。

党がソヴェトの映画芸術にたいして提出した課題——大祖国戦争の重要な諸段階を再現し、ソヴェト科学の優位性を示す——の解決のために芸術・記録映画と芸術・科学映画という二つのジャンルが生まれたのである³¹⁾

戦後、スターリン賞映画部門の受賞が報じられるのは、1946年以降である³²⁾。1946年の劇映画の第一賞は、『誓い』『ナヒーモフ提督』『石の花』の3本であり、記録映画の第一賞は、『わが国の青春』『人民の裁判』の2本であった。土方敬太も『誓い』『ナヒーモフ提督』について紹介記事を書いている³³⁾。

1947年のスターリン賞は、芸術映画（劇映画）の第一賞が『シベリア郷土物語り』であり、記録映画の第一賞は『勝利の国の一日』『ソヴェト・ウクライナ』であった³⁴⁾。その後、『ソ

ヴェト文化』誌上にて「ソヴェトの映画」という座談会が開催される。座談会では同じ頃に上映されていた『シベリア物語』についても議論され、次のようにも述べられている。

「あれ（引用者——『シベリア物語』）はスターリン賞受賞作品ですが、スターリン賞の推薦にも反省があるようですね。今まではスターリン賞は内容で点をつけていた。イデオロギー的に内容の低いものは芸術的にどんなに優れていても駄目だった。ところが今度の一九四七年度スターリン賞の特長は、単に内容ばかりでなく、内容プラス芸術的に優れたものでなければ与えられていないのです…『シベリア物語』はその中でいまのところ最高ではないですかね」³⁵⁾

1949年度のスターリン賞作品の紹介は、その後の『ソヴェト映画』に引き継がれ、同年の芸術映画部門の第一賞は、『ベルリンの陥落』『スターリングラード戦』『エルベの邂逅』であり、記録映画部門の第一賞は『世界の青春』『空軍デー』であった³⁶⁾。また、1950年度の芸術映画部門の第一賞は、『ムッソルグスキー』『密使』『解放された中国』『モスクワを遠く離れて』であり、記録映画部門の第一賞は『中国人民の勝利』であった³⁷⁾。だが、1951年度からは、芸術映画（劇映画）のみの紹介となり、第一位に『タラス・シェフチェンコ』『金星勲章騎士』、第二位に『ドンバスの炭坑』が紹介されている³⁸⁾。

土方敬太は『ソヴェト映画』第1号、第2号で「ソビエト映画の30年」を振り返り、「記録映画」「科学普及・教育映画」を解説している。前者の記録映画について次のように記す。

ソヴェト最大の記録映画スタジオであるモスクワの中央記録映画スタジオはさながら大新聞の編集局を思わしめる。国内、国外の要所要所に派遣された約二〇〇名の特派員——カメラマンや必要に応じて重要な事件の現場に派遣された特派員から時々刻々密封した金属箱に入ったフィルムの断片の



『ソヴェト映画史』1952年

中からもっとも重要な、そして興味あるものを選び出し、編集して、月五回づつソヴェト全国のスクリーンで上映されるニュース映画「ノーヴォスチ・ドウニヤ」ができれば上るのである…定期的なニュース映画の発行と並行して、中央記録映画スタジオは長編記録映画をも行っている³⁹⁾

1951年は、土方敬太はソビエト映画の指南役として、『ソヴェト映画』に「ソビエト映画鑑賞の手引」と題して5回の連載記事を書いている⁴⁰⁾。また同時期、土方敬太は雑誌『思想』における「大衆娯楽」の特集号で、「ソヴェトの娯楽と文化」を寄稿、より一般向けにソビエト映画を解説している⁴¹⁾。日本で広く言われる「文化映画」と「娯楽映画」を、ソビエト映画の「記録映画」「科学普及映画」と対比させ、その違いを論じている。

ソヴェトの映画についていうならば、いわゆる(引用者——日本の)「文化映画」に相当するものは「記録映画」および「科学普及映画」のジャンルに入れられる。そして、資本主義国で「娯楽映画」に含めているものは「芸術映画」(この「芸術」はソヴェト映画の場合では「劇」の意味をもっているが)と呼ばれる。しかしこの種の「芸術映画」と資本主義国の「非文化映画」との相違は特にさいきんの数年間にきわめて大きな角度をひろげつつある。⁴²⁾

その具体例として、アメリカ・ハリウッドのゴシップといった退廃的動向を批判し、ソ連における人民芸術の芸術性を指摘する。

たとえば映画雑誌の中には、わが国の映画ファンが求めているような俳優個人のゴシップや特ダネ記事はないかと思って探してみる。が、それはどうしても見当たらない。『映画芸術』誌には人民俳優ニコライ・チェルカーソフが論文を書きはするが、彼が体重何キロ身長何センチで、趣味とする食物は何かということも載っていないし、『ソヴェト芸術』新聞は、映画監督チャウレリヤロムが評論を書き、女優タラーソワやマレーツカヤが演劇論演技論を高度な芸術的立場から書く。ここではハリウッド流のゴシップは全く見出すことは出来ない。なぜなら、そのようなゴシップは決して人民芸術を高める役目をしないからである。⁴³⁾

その後、1952年には亀井文夫との共著で『ソヴェト映画史』を刊行する。同書は『ソヴェト映画』の記事を基にソビエト映画を体系的に整理した通史であった。土方自身、「この本の著者は……亀井文夫氏を中心として、雑誌『ソヴェト映画』の編集部が集った岩淵正嘉、成田梅吉、土方敬太の協力によってなされたものであります」として、「執筆分担は総論を亀井文夫、第一期(誕生よりトーキー迄)ならびに理論編を岩淵正嘉、第二期(トーキー発生より戦争迄)ならびに記録・教育映画編を土方敬太、第三期(戦争中)ならびに人物編を成田梅吉が担当し、第四期(戦後今日迄)は、岩淵、成田、土方が三人で協同執筆しました」とする⁴⁴⁾。

スターリン賞「劇映画」ジャンルには、興行的にも成功し日本でも上映された『シベリア物語』が入っていたが、『ソヴェト映画史』においては特に「劇映画」の項目が設けられていない。

結果的にみて、占領期・50年代の日本で上映されたソビエト映画は「劇映画」ばかりであったわけであるが、土方敬太がこの書に込めた

思いはどのようなものであったのか。それは「本書の中で書かれている映画の大部分は、ほとんどその九九%が日本の広範な映画観客にふれていないという現実を、読者諸兄はどう考えるであろうか？」という一文に集約されていると考えられる⁴⁵⁾。こうした思いは『ソヴェト映画』編集部においても、ソヴェト映画の紹介と両輪をなす上映運動にもつながってくるのであった。

5 映画輸入クォータ制批判

日本の講和独立による占領終結と同時期、外国映画の輸入配給は、1950年末で一国一社制が廃止となり、1951年度からは新たな輸入クォータ制が設定された。同制度は、外国映画輸入・配給のラッシュを抑える目的で、大蔵省が為替管理に基づいて定めたものであった。

その問題点として、GHQが輸入本数を管理していた過去の対日輸出本数の実績を基準として、それ以降も前年度実績に基づいて次年度の割当を定める方式が採用された点にあった。それによってアメリカ映画の市場占有率が圧倒的に高かった状況が、そのまま1951年以降も日本政府によって引き継がれることになった。その結果、ソヴェト映画について輸入割当は、1951年度も前年と同じく3本のままであった。

1950年8月の『ソヴェト映画』の記事は、同年6月時点でのソヴェト映画公開の状況を記している。記事によれば、1945～1949年までのソ連の上映本数（累計）は、アメリカ238本に対し、ソ連は16本であり、アメリカの10分の1にも満たない本数ということであった（表1）。

終戦いらい日本で上映された外国映画の数は、アメリカ238、フランス51、イギリス43、ソヴェト16で、1949年末現在、ソヴェト映画は、原則として年7本の公開を許可されることになっている。…ところが、去年封切られたソヴェト映画は、わずか3本にすぎず今年も、6月1日現在「先

表1 戦後上映された外国映画の本数

	アメリカ	フランス	イギリス	ソビエト
1945～1949年 (累計)	238	51	43	16

駆者の道」「三つの邂逅」「遠い花嫁」の3本の公開が確定されているだけである⁴⁶⁾

『ソヴェト映画』は1950年の創刊からソヴェト映画を積極的に紹介してきたにもかかわらず、講和独立後の1952年となってもソヴェト映画の輸入もままならず、上映された本数も年間2～3本と低調であった。そのため、1951年の輸入クォータ制の動向をみながらも、ソヴェト映画の自主上映運動の主張を続けていくことになる⁴⁷⁾。

土方敬太は、1951年2月の段階で「戦後の五年間に約二百本がつけられていることとなります。ところが戦後日本で封切られたソヴェト映画はわずか二二本にすぎないのです。…しかも、戦後のソヴェト映画界を代表するような作品、スターリン賞第一賞になった作品は、「石の花」と「シベリア物語」を除いては上映されていないのです」と指摘する⁴⁸⁾。7月に開催した「ソヴェト映画友の会」の席上でも、「事務局からごく簡単な経過報告がなされ、続いておなじみの土方敬太氏が「外画割当のなかにソヴェト映画のない現状」を話し」ている⁴⁹⁾。

『ソヴェト映画』は1951年10月号で、「ソヴェト映画上映促進のために」の特集を組み、「ソヴェト映画はなぜ上映されないのか？」の座談会を掲載している⁵⁰⁾。また、「輸入制限への批判と反響」と題して、桑原武夫、平野義太郎、大熊信行、畑中政治らのハガキ回答コメントを紹介している。

ソヴェト映画の状況は、「ソヴェトが、アメリカとならぶ、世界でもっとも大きな映画の国であるなどということを考えることができないように仕向けられている」として、次のように述べる。

日本で上映されたソヴェト映画のもっとも

代表的な作品は、『シベリア物語』だろうが、これ以外の作品は、かならずしも代表的な傑作とはいえないかもしれない。ところが、日本で公開を許されたソヴェト映画は、そういう代表的な作品が、しかも六年間に十数本しかないというわけだ。『若き親衛隊』『ベルリン陥落』『クバンのコザック』『ムッソルグスキー』というような、世界中のどこへもっていても傑作として通るすぐれた作品は、日本では上映されていない。多くの人たちが、こんにちのような状態を当たり前だと思い込み、ソヴェト映画に対する不当な取扱いに気づかずにいるのも無理からぬことである。⁵¹⁾

1951年12月の『ソヴェト映画』誌上で、長らく代表的なソビエト映画作品を紹介してきた連載「ソヴェト映画の足跡・名作場面集」が最終回を迎えることとなった。「本号までに掲載された作品はつぎのとおりです」として、以下の15作品が紹介された⁵²⁾。

1. チャパーエフ (1934年)、2. マキシム三部作 (1934～38年)、3. バルチック艦隊の代議員 (1936年)、4. 十月のレーニン (1937年)、1918年のレーニン (1939年)、5. ピョートル大帝 (1937年)、6. ゴーリキー三部作 (1937～39年)、7. 虹 (1943年)、8. 人間 217号 (1944年)、9. ゴーヤ (1944年)、10. 罪なき罪人 (1945年)、11. 偉大なる転換 (1945年)、12. 誓い (1946年)、13. 村の女教師 (1948年)、14. ロシヤ問題 (1948年)、15. シベリヤ物語 (1948年)

ここで取り上げられている作品の大半は、1945年以前の戦前のものばかりであった。こうした名作紹介も、一般に観ることのできる戦後作品が少なかったことに起因しているのだろう。

1952年8月、大蔵省為替局は外国映画業者を招いて、1952年度外画輸入方針を通達、ついにソビエト映画の割り当てはゼロとなった。

表2 戦後日本で公開されたソヴェト映画

	ソビエト映画 (長編映画の部)
1946	1本
1947	2本
1948	9本
1949	3本
1950	3本
1951	2本
1952	2本
合計	22本

この結果を受けて、「ソヴェト映画の割当は一本もないが、これについて大蔵省は、「日ソの国交調整ができてから、割当てる」としている。国交調整を破カイしているのは日本政府じしんではないか」と政府政策を批判する⁵³⁾。

そして、『ソヴェト映画』1952年12月号には、1946年から1952年まで戦後日本で公開されたソヴェト映画の本数が記されている⁵⁴⁾。アメリカ映画がのべ709本に対して、ソビエト映画は22本で、公開されたアメリカ映画は実にソビエト映画の32.2倍という数字になっていた (表2)。

6 『ソヴェト映画』の終刊

『ソヴェト映画』の編集に携わっていたのは、北星商事の土方敬太や、映画評論家でプロデューサーの岩崎昶、同じく映画評論家だった瓜生忠夫や山内達一、評論家で翻訳者の岩淵正嘉、批評家で映画技師の成田梅吉、映画監督の木村壮十二、撮影監督の宮島義勇、記録映画監督の亀井文夫や野田真吉といった左翼的な日本の映画人ら10名であった。

『ソヴェト映画』の編集陣は、創刊当初から明示されていなかった。その発行には複数の団体が関わっていただけでなく、編集者が意図的に自らの正体を特定しづらくしていたようである。『ソヴェト映画』の最終頁には「編集後記」が設けられていたが、執筆していた編集委員名は明かされないままであった。彼らの名前が初めて公表されたのは、『ソヴェト映画』の最終号 (第34号、1954年6月) においてで

あり、この時点で雑誌の廃刊は既に決まっていた可能性が高かった⁵⁵⁾。

1953年の『映画年鑑』によると、北星商事の状況は以下のように記されている。

北星映画は創立以来、ソ連映画の配給に専念してきたが、ソ連映画の輸入本数が少ないため、五一年度から新生面の開拓を邦画配給に求め、「どっこい生きてる」を第一陣として、邦画独立プロ作品の配給を開始した。…そこで同社はさらにすすんで独立プロ各社を糾合し、各プロの作品を計画的に配給」することとなった。⁵⁶⁾

『ソヴェト映画』の発行元は、第5号(1950年8月号)で、北星商事からソヴェト映画社となり、第30号(1952年10月号)から世界映画社へと移っていく。発行元の北星商事は、ソヴェト映画社、世界映画社へと社名を変更、途中、季刊誌にも衣替えしたが、1954年6月に終刊した。

だがその世界映画社も、再度、経営難から改組、独立映画と社名を変え独立プロ作品の配給を手掛けたが、邦画製作の大東映画と洋画配給の大洋映画に分離した⁵⁷⁾。大洋映画はのちに日本ヘラルド社へと事業が継承されていった。

1948年、『プラウダ』紙記者のO・クルガーノフが来日したとき、欧州諸国のように日本にも大衆組織としての日ソ親善協会の結成が必要であるという意見が強く進言された。そして1949年4月、日ソ親善協会が発足する⁵⁸⁾。協会設立の発起団体には、労働組合、青年団体、婦人団体、学生団体、文化団体、生活協同組合などと並んで、元ソ連抑留者の団体(ソ同盟帰還者生活擁護同盟)が加わっていた。そして、ソビエト映画の上映も大手配給会社を通じてだけでなく、こうした友好団体においても映画会や映画の巡回講師派遣などの活動で積極的に上映がなされるようになっていた。1950年初頭には、同協会は約1万4000名の会員数を得て、のちに日ソ国交回復の要求をまとめ、1956年の日ソ共同宣言を後押しすることになる⁵⁹⁾。

1957年当時の週刊誌は「ソ連文化攻勢の底力」と題し、「1960年、輝かしい「3S文化」(舞台芸術、スポーツ、科学)の連続攻勢」とする特集を組んでいる⁶⁰⁾。「日本は、このところ、ちょいとしたソ連ブームのようですが、世界中がそうらしい」としてソ連本国から日本への文化攻勢をみている。1956年、ソ連における「スターリン批判」「雪解け」以降の日ソ国交回復であったが、ソ連からの情報流入は急増するものの、ソビエト映画の上映ははかばかしいものでなかったとみられる。

ソ連の映画管理機関も1953年に映画省が廃止、文化省映画局となり、1963年には関係会議映画国家委員会、1965年には閣僚会議付属映画委員会へと推移した⁶¹⁾。日本においては1963年から第一回「ソビエト映画祭」が、在日ソ連大使館主催で開催されていくことになった。

7 おわりに

占領期・50年代において土方敬太はソビエト映画を精力的に紹介してきたが、50年代後半以降、映画業界から距離を置いていったようにみえる。その理由について詳細は不明であるが、後年、次のように語っている。

「アメリカの圧力などもあり、戦前に輸入された最高本数までは許可するということができたが、実際にはアメリカ映画五〇本に対してソビエト映画五、六本という状況でした。当時は「石の花」「シベリア物語」が大反響をよんでいました。この会社はのち独立映画、大東映画とかわるわかって最後は破産し、…この間国際情勢の変化は激しいものがありました」⁶²⁾

この発言において、公開映画本数の記憶ちがいはあるものの、北星商事の事業を継承したその後の会社が軒並み破産していたことがうかがえる。だが、占領期・50年代におけるソビエト映画紹介者としての土方敬太は、当時の映画文化のありかたを知る上でも注目されるべきで

はないだろうか。

最後に、本論のまとめとして土方敬太が果たしてきた役割を三点指摘しておきたい。

第一に、占領期におけるソビエト映画配給で北星商事が占める位置づけが変化していったことには、土方敬太が関与した点が大きかった。その後、北星商事では『ソヴェト映画』の発行に携わりソビエト映画の宣伝・普及に携わった。第二に、1940年代から50年代のソ連のスターリン賞などから、一般ソビエト映画ジャンルといった枠組を提示し、一般観衆の理解に資してきたが、結果的にはイデオロギー色が少ない

とみられた「劇映画」ばかりが日本での上映を許可された。第三に、日本政府による映画輸入クォーター制の下、1950年代以降もソビエト映画の輸入割当は拡大しなかったため、自主上映運動を『ソヴェト映画』誌上で訴え続けた。そうした地道な活動が60年代以降のソビエト映画紹介へとつながっていった。

本論の今後の課題としては、占領期・50年におけるソビエト映画の日本への流入を、ロシア側のソビエト映画関連史資料から解き明かしていく必要があると考えている。

■註

- 1) 当時の回想としては、土方敬太「モスクワの生活 モスクワ 1933 - 1937年」『民主評論』1948年12月号、がある。
- 2) 土方梅子『土方梅子自伝』早川書房、1976年、265頁
- 3) シーモノフは後年、『日本-46』ソビエツカヤ・ロシア出版社、1977年、という1946年の滞日日記を残している。また、シーモノフと土方親子の交流については、エカテリーナ・シーモノフ「三通の手紙」、来日ロシア人研究会『日露交流文集』2002年も参照。
- 4) 以後、1967年に日ソ協会常任理事、1972年から83年まで同協会理事長、1983年から88年までは同協会副会長を務め、91年から同顧問。1992年12月28日に72歳で逝去。『朝日新聞』1992年12月28日、「土方敬太」訃報欄を参照。
- 5) 『朝日新聞』1968年3月27日記事「ひと」欄。「ゴリキー生誕百年記念祭のおぜん立てをする 土方敬太」
- 6) 「土方敬太氏に聞く」『日本とソビエト』1987年6月10・15日号
- 7) 土方敬太「ソヴェトの藝術界」『ソヴェト文化』3号、1946年7-8月。同「ソヴェト文学の三十年」『ソヴェト文化』8号、1947年12月。同「ソヴェト演劇の近況」『ソヴェト文化』9号、1948年1月
- 8) このほか、占領期においては、「極東軍事裁判、対日理事会のソ連代表団つき通訳」「三菱21号館勤務」「全労連（全国労働組合連絡協議会）」「ソ連映画の輸入」などの職名もみられる。
- 9) 谷川建司『アメリカ映画と占領政策』京都大学学術出版会、2002年、277-278頁
- 10) 「一国一社制度」谷川建司編『占領期のキーワード100—1945-1952』青弓社、2011年、264-268頁。同書では『映画年鑑 1950年版』の用例を紹介している。
- 11) 引用は、フィオードロフ・アナスタシア『リアリズムの幻想—日ソ映画交流史 [1925-1955]』森話社、2018年、167-168頁より。原資料は、ロシア連邦政府公文書館（GARF）「VOKS 1923-1957」、F5283.O19.に所蔵。また、アメリカ国立公文書館（NARA）RG331、Box8661の文書「袋一平 略歴」によれば、袋は1945年5月末に戦災を被り「長野県ニ退避」、「一九四五年十月ヨリ ヤブキノノ再興ニ着手セリ」とも記される。
- 12) 戦前の袋一平については、岡田秀則「旅の終わり—袋一平とソビエト映画ポスター」『東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵 無声時代ソビエト映画ポスター《袋一平コレクション》カタログ』2009年、に詳しい。
- 13) 前掲・谷川（2002）、396頁
- 14) RG331、Box8661、“JAPAN SOVIET MOTION PICTURE COMPANY” ,1946 July 29
- 15) RG331、Box8661、「社名及社内構成報告ノ件 日ソ映画社代表 袋一平」1946年11月5日
- 16) RG331、Box8661、「ソビエツト映画検閲申請ノ件」（1946年11月15日）の文書には、『マラホフ丘』『勝利の行進』『アントン・イヴァノヴィッチ怒る』『音楽ノ一事件』『女囚第二一七号』『生命ノ力』（いずれも原題）の6本の申請がなされている。
- 17) RG331、Box8603、“Subject : Exhibition of Films by Soviet Mission in Mitsubishi 21 Building, Tokyo.” From G2 to Diplomatic Section, 1946 Nov. 8

- 18) 岩崎昶・山内達一・美作太郎・馬上義太郎・今井正・土方敬太・袋一平「座談会 ソヴェトの映画」『ソヴェト文化』16号、1949年3月、14頁
- 19) RG331、Box8661、“HOKUSEI SHOJI KABUSIKI-KAISYA”, 1948, June 18
- 20) RG331、Box8661、“North Star Commercial Co.Ltd submits Russian film for censorship” 1948, July 8、河野重広はソビエト研究者協会関係者。16ミリフィルムは、劇場用の35ミリフィルムに対して持ち運びが簡便で、どこでも映写機で上映ができるものとして活用することが考えられたと思われる。
- 21) RG331、Box8661、“PERSONAL RECORDS “Kazuo Nakai” この文書でナカイ・カズオとされる人物は、生年・経歴からみて、戦前の司法省副大臣であり、1947年2月まで神戸市長を務めた中井一夫である。その後、日ソ映画社の社長に就任したようである。
- 22) RG331、Box8603、CCD Special Information Report, “Distribution of Soviet Films” ,1949 April 3, (Source) Mrs Nakai, representative, Japan-Soviet Motion Picture Company.
- 23) RG331、Box8661、発刊番号、日付なしのCCDメモ(赤鉛筆で記入)。この文書には、“Yoshi HIJIKATA is listed on the board of directors of HOKUSEI as Hisayoshi HIJIKATA (土方久敬) which is his true name and is an auditor of this company. HOKUSEI has another HIJIKATA with 1st name Keita, who is the son of Yoshi Hijikata. Keita is also a stage producer and director and is a student of the young men's Communist Drama Club. He is in charge of production in this company” と記されている。
- 24) 亀井文夫・河原崎国太郎・土方敬太「ソヴェト映画の印象」『ソヴェト映画』第1号、1950年2月、18 - 22頁
- 25) 前掲・フィオードロワ(2018)、183頁。『ソヴェト映画』でしばしば取り上げられた雑誌は『イスクーストボ・キノ(芸術映画)』であり、新聞では『ソビエツコエ・イスクーストボ(ソビエト芸術)』であった。
- 26) 前掲・フィオードロワ(2018)、169頁
- 27) 前掲・フィオードロワ(2018)、169 - 170頁
- 28) 「ソビエト映画・未公開作品目録」『ソヴェト映画』18号、1951年10月、20 - 21頁
- 29) スターリン賞における「劇映画」は、「芸術映画」とも訳される場合があるようである。これは「芸術」をめぐるロシア語の「イスクーストヴォ」と「フドジェーニストボ」(いずれも「芸術」の意)の日本語訳が『ソヴェト映画』誌上で担当者によって統一されていないことに起因しているのではないかと考えられる。
- 30) 今村太平「ソヴェト映画の特徴——大衆とヒーローの問題」『ソヴェト映画』1号、1950年2月、10頁
- 31) 「ソ同盟映画大臣イー・ボリャコフ「平和のためにたたかう世界の映画」『ソヴェト映画』17号、1951年9月、8 - 9頁。ソ連では芸術・記録映画、芸術・科学映画のほか、伝記映画、友戦映画、冒険映画、建設を描いた映画、文学作品映画、同盟共和国映画、記録映画、教育映画、漫画映画、天然色映画などといった、さまざまな映画ジャンルが存在することが紹介されている。
- 32) 「1946年 輝かしいスターリン賞受賞者 芸術部門」『ソヴェト文化』6号、1946年9月、18 - 19頁
- 33) 土方敬太「スターリン賞にかがやく二つの映画『誓い』と『ナヒーモフ提督』」『ソヴェト文化』7号、1946年10月、22 - 26頁
- 34) K・H(土方敬太)「一九四七年度スターリン賞 映画の部」『ソヴェト文化』13号、1948年8月、18 - 19頁。このときの『シベリア郷土物語り』のタイトルはのちに『シベリア物語』と表記される。
- 35) 前掲「座談会 ソヴェトの映画」『ソヴェト文化』16号、1949年3月、6 - 17頁、における馬上の発言。この号の表紙は、映画『シベリア物語』である。
- 36) 「1949年度スターリン賞作品」『ソヴェト映画』5号、1950年8月、27頁。1948年度受賞作は、『ソヴェト文化』『ソヴェト映画』が発行されていない時期にあたるため不詳。
- 37) 「1950年度スターリン賞作品」『ソヴェト映画』16号、1951年8月、11頁。このとき、「記録映画」は「ニュース・記録映画部門」と表記されている。
- 38) 「1951年度スターリン賞にかがやく五つの劇映画」『ソヴェト映画』24号、1952年4月、6頁
- 39) 土方敬太「ソヴェト映画の三十年(1) ソヴェトの記録映画」『ソヴェト映画』1号、1950年2月、13頁。同「(2) 科学普及・教育映画の発展」『ソヴェト映画』2号、1950年3月、17頁
- 40) 土方敬太「ソビエト映画 鑑賞の手引」『ソヴェト映画』における5回の連載(1951年2月 - 6月)。各回の記事タイトルは、「ソヴェト映画の特殊な性格」10号、「ソヴェト映画の明るさ」11号、「民族映画と合作映画」12号、「ソヴェト映画の訴えるもの」13号、「平和を熱愛するソヴェト映画」14号。
- 41) 土方敬太「ソヴェトの娯楽と文化」『思想』326号「特集：大衆娯楽——実態と分析」1951年8月
- 42) 前掲・土方(1951)、694頁

- 43) 前掲・土方 (1951)、695 頁
- 44) 亀井文夫・土方敬太『ソヴェト映画史』白水社、1952年、298 - 299 頁
- 45) 前掲・亀井・土方 (1952)、6 頁
- 46) 「ソヴェト映画公開のために」『ソヴェト映画』第5号・1950年8月、11 頁
- 47) 例えば、のちにソビエト映画評論家となる山田和夫 (1928 - 2012) は、1950年代後半、映画『戦艦ポチョムキン』の輸入運動、全国非劇場自主上映運動に関わっていったことを記している。『ロシア・ソビエト映画史 — エイゼンシュテインからソクーロフへ』キネマ旬報社、1997年、253 - 254 頁
- 48) 土方敬太「ソビエト映画 鑑賞の手引 映画をみる心構え ソヴェト映画の特殊な性格」『ソヴェト映画』10号、1951年2月、27 頁
- 49) 「弾圧をけて — 盛会だった友の会東京総会」『ソヴェト映画』30号、1952年10月、76 頁
- 50) 北星商事・関東支社長・山口雅照、関西支社長・長谷川豊、九州支社長・木付陸一、中部支社長・新沼杏一 (座談会)「ソヴェト映画はなぜ上映されないのか?」『ソヴェト映画』18号、1951年10月、10 - 12 頁
- 51) 寺田雪男「戦後 ますます激化する抑圧の状況」前掲『ソヴェト映画』18号、13 頁
- 52) 「ソヴェト映画の足跡・名作場面集15」『ソヴェト映画』20号、1951年12月号、34 - 35 頁
- 53) 「52年度の外画割当 ソヴェト映画は一本もなし」『ソヴェト映画』30号、1952年10月、62 頁
- 54) 「戦後日本で公開されたソヴェト映画 長編映画の部」『ソヴェト映画』第31号・1952年12月、4 頁
- 55) フィオードロワ・アナスタシア『ソヴェト映画』解説・総目次・索引、不二出版、2016年、21 頁
- 56) 『映画年鑑 1953年版』時事通信社、1953年、124 頁
- 57) 日本ヘラルド映画の宣伝部長・映画プロデューサーであった原正人は、同社入社前にソ連映画の配給会社に勤務した。その当手を回想して、「北星映画というソ連映画の配給会社があったんだけど、すぐ潰れちゃったんです。その北星映画が潰れてできたのが、独立映画です。あの頃は会社が負債を背負うと、すぐに会社を潰して、別の名前にするんです。それが、独立映画です。独立映画が潰れて、潰れた時に大東映画になって、大東映画から分離していったのが大洋映画で、これがヘラルドとくっついたんです」というエピソードを残している。谷川建司「映画宣伝／プロデューサー原正人の伝説 第3回」『Banger!!!』2019年8月21日記事 <https://www.banger.jp/movie/15257/>
- 58) 「日ソ親善協会八年の歩み」『日本とソビエト』1957年6月15日
- 59) 1951年2月、第10回国会・衆議院会議録「第10回国会・海外同胞引揚に関する特別委員会」
- 60) 特集「ソ連文化攻勢の底力」『サンデー毎日』1957年12月1日号
- 61) 前掲・山田 (1997)、177 - 178 頁
- 62) 前掲『日本とソビエト』1987年6月10・15日号

〔付記〕

本研究は、科研費・基盤 (C)「戦後冷戦期におけるソビエト文化の流入・受容に関する総合的研究」(代表：吉田則昭) (21K12436) の助成によるものである。